

【研究ノート】

## 北川アイ子さんのウイルタのホホー（人形）

笹倉 いる美

### はじめに

筆者が勤務する北海道立北方民族博物館（以下北方民族博物館）では、1997（平成9）年に、「樺太 1905-45:日本領時代の少数民族」というタイトルの特別展を開催した。この特別展に関連した事業の案として、ホホー（ウイルタ語で人形のこと）づくりが候補にあがり、北川アイ子さんに講習会の講師を依頼した。

現在網走に暮らすウイルタの北川アイ子さん（以下北川さん）は、1930（昭和5）年に樺太（サハリン）の野頃（現在のウラジミールゴ）で生まれ、その後、敷香（現在のポロナイスク）郊外のオタスに移り、ここで少女時代をすごした。オタスには教育所がおかれ、北川さんもここに通っていた。少女時代には布でつくった人形であそんでいたという。

ウイルタの人形の素材には次の4種類がある。(1) 木製、(2) 布製、(3) 木の葉製、(4) 紙製である。

このうち木製のものは、少女が遊ぶための人形というよりも、木偶やお守りとしての役割をもっており、ウイルタ語では *səwa*、このうち特にシャマンのものを *siiwurə* という。また形状や用途によっては、これ以外の語が用いられることもある。

玩具としての人形には、布製、木の葉製、紙製のものがあり、ウイルタ語で *xoxoo*（ホホー）という。

このほかに北川アイ子さんが白樺樹皮を人形（ひとがた）に切り抜いたことがあるのを筆者は見たが、他の例を知らない。<sup>1</sup>

この研究ノートでは北方民族博物館で開催したホホーづくりを紹介するとともに、戦前につくられた、ウイルタのホホーについて考察する。

文中で使用するウイルタ語は池上（1997）による。引用は、現在使わない表記も含め書き換えは行っていないが、旧字体は新字体とした。

### ホホーの紹介と近隣諸民族の人形との比較

「河野（1942）」にホホーが紹介されている。河野は「樺太のギリヤークやオロッコの少女達は、木の葉、草の葉、等を集めて人形をつくることを知って居る」とし、あいにく丁度よい木の葉、草の葉がなかったため、手持ちの紙によってつくってもらったという人形の写真が掲載されている（図1：上段がニブフの紙製人形で、下段がウイルタのホホー）。図のホホーは左から、男子、婦人、赤ちゃんで、この三者に共通しているのは、「頭部が円く、顔面をはつきりと区別し、後に髪をたらし居らぬことである」（河野 1942:13-14）。

池上二良は市立函館博物館に所蔵されたもの（図2）及び、日本地理風俗体系（1930年発行）に掲載された写真を『ウイルタの暮らしと民具』に図版 135-138 として掲載し、次のように説明している。「*xoxoo*（人形）は布や紙や草の葉でつくる。かおに目や鼻や口はない。138の右三つは頭布（*bilaatu*）をまいている。左はゆりかごに入っている。河野（1942）には、材料の紙を与えてつくってもらったという人形の写真がのっている。それはすそがはばひろく、

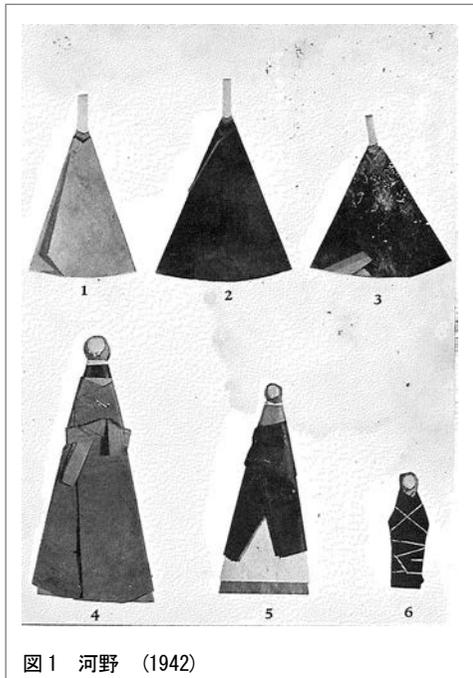


図1 河野 (1942)

佐藤チヨさん<sup>2</sup> が幼児あそんだのもそのようなものだったという。」(池上 1982:106)

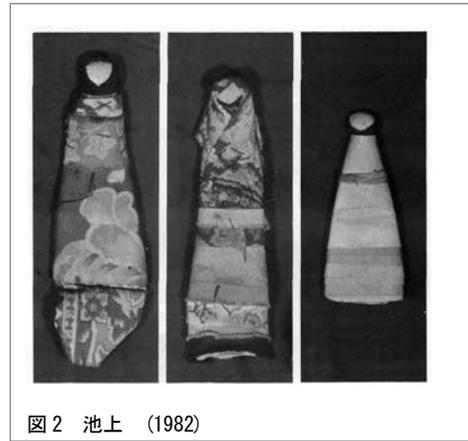


図2 池上 (1982)

池上が紹介した、市立函館博物館所蔵のもの、日本地理風俗体系の写真には、布製の服もみられる。

言語学者の服部健が収集した資料(北方民族博物館所蔵)に、ニブフ(図3)とウイлтаの人形(図4)がある。これらは1941(昭和16)年頃につくられたもので、いずれも紙製であるが、ウイлтаのホホーの顔と髪を表した部分は布製になっている。また、衣服や帯は糸で縫い止められている。ニブフの頭部は角張り、後ろに髪を表した紙を垂らしている(図3右参照)。



図3 ニブフの紙製人形  
左 16.6cm 右 14.7cm



図4 ウイлтаのホホー<sup>3</sup>  
左 14.5cm 右 11.8cm

少ない例ではあるが、図1、図2、図4のウイлтаのホホーを比較すると、紙製と布製の違いはあっても形状にはさほど違いはないと思える。

ホホーとニブフの紙製人形は、頭部と、服の重ね具合に違いがみられる。またニブフの紙製人形は帯をしていない。いずれも左前身頃が上側になっているのは実際の衣服と共通する。

ウイлтаとニブフの紙製人形について、紙製ということと、特にニブフの紙製人形の襟部分の重ね具合から(十二単様になっている)、和紙でつくる日本の姉様人形(図5)との共通性

を感じ、オタスの教育所で教えていた川村ナヲの影響を受けたものではないかと推測していた。しかし、丹菊逸治氏が筆者に指摘したように、ナーナイの紙人形（図6 北方民族博物館所蔵）との関係を考えてもよいかもしれない。ただし、ナーナイの人形は着せ替え人形的な要素をもち、頭部と服が別々になっているが、ニブフやウイлтаの紙製人形は着せ替え人形にはなっていない。ナーナイの人形の頭部には、髪の毛を表す糸がつけられている。

Соболевская は、ナーナイ、ウリチ、ウデへ、オロチの人形を紹介しており、なかでオロチの人形が、ウイлтаのホホーに似ている。（図7 Соболевская 1997:12）

これらのものと比較すると、ウイлтаのホホーの特徴として、丸い頭部であることと、頭部にぴったりとした、あるいは三角巾状の頭巾をかぶっていることがあげられる。顔に、目、鼻、口が描かれていないのは、近隣諸民族の人形にも共通する特徴である。<sup>4</sup>



図5 姉様人形



図6 ナーナイの紙製人形  
上二段が服と布団。下段が頭部。

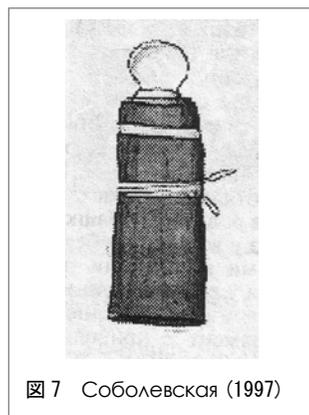


図7 Соболевская (1997)

### 北川アイ子さんのホホー

北川さんは、講習会を開催する準備として昔のことを思い出しながら、試行錯誤をくりかえし、講座用のホホーをつくりあげた。

その結果できあがったホホーを、先述したホホーと比較すると、顔に目鼻口がないことや、黒色の布をかぶっていることは共通する。一番の大きな違いは、腕がついていることである。また幾分ふっくらとしている。

オタスでは端切れなどを材料にしていたということであったが、講座用には大量の布と綿を用意したため、北川さんはふんだんに布を使っており、結果としてふっくらめのお人形になった。布を使って試作する前には、ティッシュペーパーを材料に顔と胴を、紙で服をつくっていた。この時のホホーは頭部に比して胴の薄いものであった。

また腕は、ホホーにウイлтаの衣服を着せようとしたため必要になったと考えられる。北川さんのホホーが着る服は、ウイлта語でpoktoとよばれる衣服を作成するとき、基本的には



図8 ホホーをつくる北川さん  
1997年7月撮影

同じ手順を踏んでつくられている。(笹倉 1999:128 参照)<sup>5</sup>

### 北川さんのホホーの作り方

材料 顔 (白色の木綿布 1 枚、14cm×14cm 中央に直径 10cm の円を鉛筆などで描いておく)

胴 (白色の木綿布 1 枚、縦 14cm×横 16cm)

頭巾 (黒色の木綿布 1 枚 底辺 15cm×高さ 15cm の直角三角形)

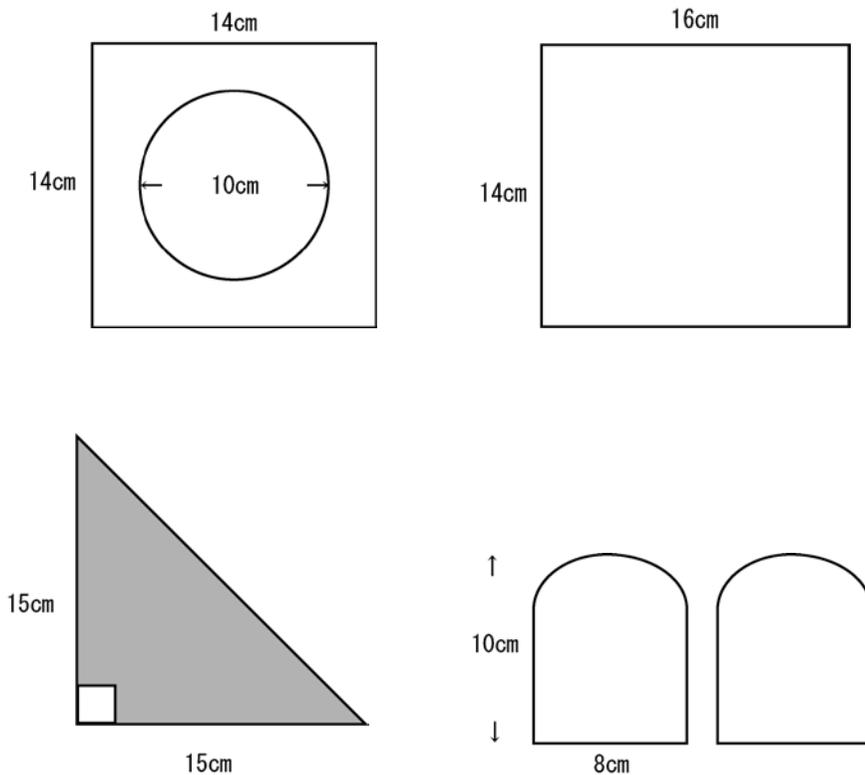
腕 (白色の木綿布 2 枚 縦 10cm×横 8cm 上部は半円形)

衣服にする布、帯にする布 適宜 (できあがったホホーにあわせる)

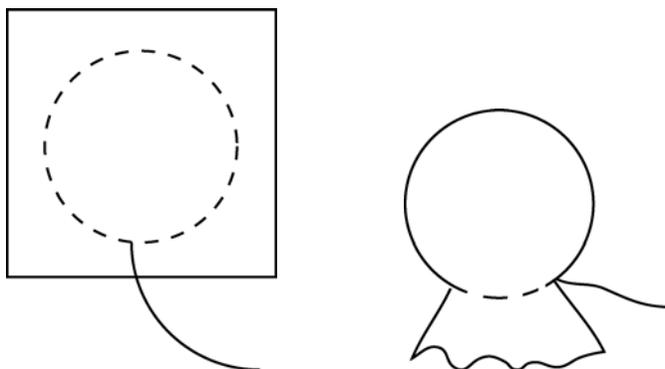
綿 (わた)

道具 はさみ、針、棒 (綿をつめるときにつかう) 等

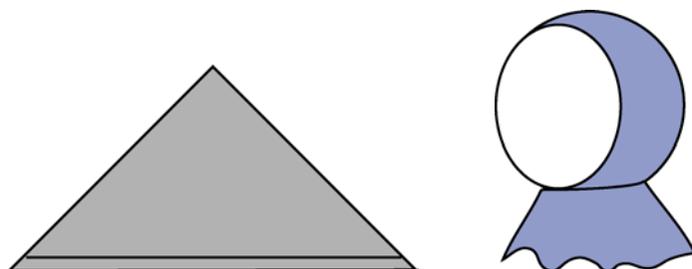
サイズは北方民族博物館の講習会用のもので、北川さんは様々な大きさのものをつくっている。



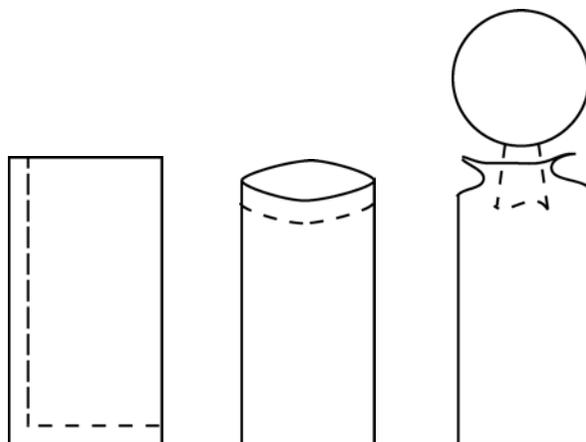
- ① 顔になる布に描いてある線の上を波縫いする。糸を引っ張って袋状にし、顔にしわがでないように気を付けながら綿をつめる。首のところは糸をぐるぐる巻いて縫いとめる。



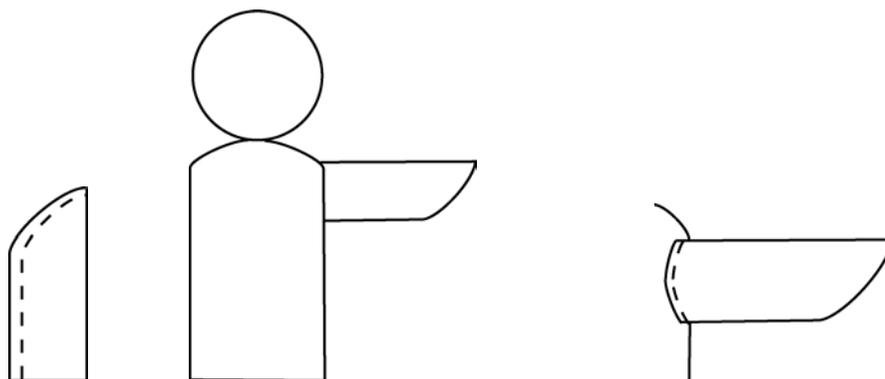
- ② 頭巾の斜辺を 1cm くらい内側に折り込み、頭にかぶせ、首のところは糸をぐるぐる巻いて縫いとめる。



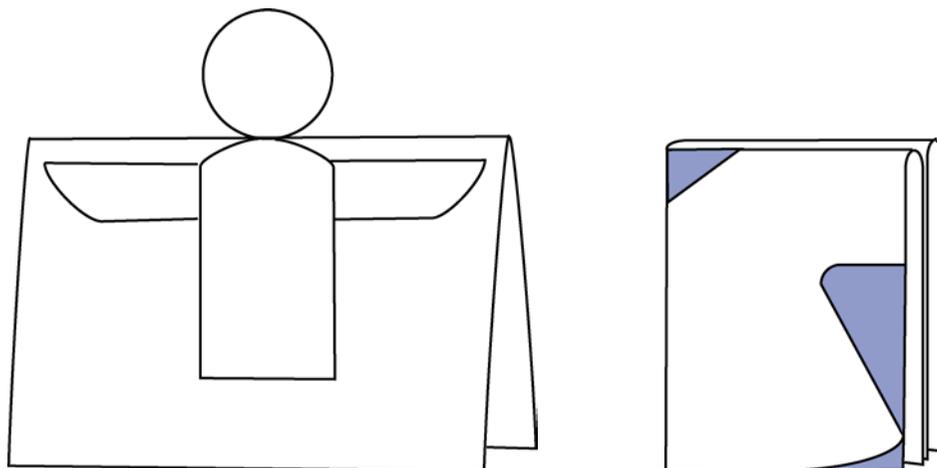
- ③ 体になる布を半分に折って、袋をつくり、裏返しにして綿をつめる。1cm くらい内側に折り返し、波縫いにし（針と糸は抜かない）、綿をかきわけて頭をいれ、糸をぐるぐる巻いて縫いとめる。このとき綿が足りないときは追加する。



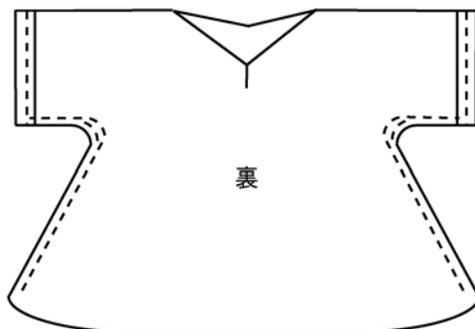
- ④ 腕になる布を半分に折って、縁を縫い、裏返しにして綿をつめる。腕の縫い目が下になるようにして図のように縫いつける。腕が万歳をしないように注意する。



- ⑤ ホホーに、服となる布を二つ折りにしてあて、裾を少しながめにしてとる。布を四つ折りし、図のように裁つ。



- ⑥ 服の表を内側にして、人形の頭がはいるように、少し首のところを縦に切る。切りすぎないように注意する。袖からわきのほうへ縫ってゆく。わきの下は返し針をする。



- ⑦ 服を裏返してホホーに着せ、胴がみえないくらいの長さのところで服の裾を内側に折り返して縫う。帯をして完成。



## 謝 辞

北川アイ子さんには、数多くのことを教えていただきました。また、日本玩具博物館学芸員の尾崎織女さんには、姉様人形について教示いただいたうえ、ご自身がおつくりになった人形を提供いただきました。東京外国語大学の丹菊逸治さん、音楽家の篠原智花さんにはニブフとナーナイの人形について教示いただいたほか、資料を提供いただきました。記して感謝申し上げます。

## [注]

1. オタスでウイルタやサハがトナカイの形に白樺樹皮を切り抜いたものが報告されている（山本 1943、北海道立北方民族博物館 1997）、またウイルタのお守りでは、トナカイ革をカエル形等に切り抜いたものがある。
2. サハリン出身のウイルタ語話者（1910年頃～1985年）。
3. 服の部分に文様がみえるが、別の折り紙製の切り絵が湿気によって色写りしたもので、製作時にはなかったものである。
4. チャダーエヴァはチュクチ、ナーナイ、ウリチ、ウデへの人形に共通する特徴として、「顔がのっぺらぼうであることと、衣服のイミテーションであること」（チャダーエヴァ 1993:92）をあげている。

また「極東諸民族の伝統的な観念によれば、まさに目を通して、きわめて有害な霊ブシヤクが人形の中に棲みつき、持ち主である人間に対して陰謀をたくらむのである」(チャダーエヴァ 1993:76) と、これら諸民族の人形に目のないことを説明している。北川さんになぜ目鼻口をつけないのかお聞きしたときには、これほどはっきりとは理由をお話しされなかったが、目鼻口をつけることはよくないことであるからという意味の返答をされた。北川さんがあるホホーに目、口を描いた時には、いたずらっぽそうな顔つきをされていた。

5. 人間用では、腕の部分と、前の重なるの部分に布を足す。北川さんがつくったホホーには、前の重なり部分に布を足したものもあり、北方民族博物館で所蔵している。

## 参考文献

チャダーエヴァ、A. (斎藤君子訳)

1993 『シベリア民族玩具の謎』 恒文社

北海道立北方民族博物館編

1997 『第12回特別展図録 樺太1905-45：日本領時代の少数民族』 北海道立北方民族博物館

池上二良編

1983 『ウイльтаの暮らしと民具』 網走市北方民俗文化保存協会

池上二良

1997 『ウイльта語辞典』 北海道大学図書刊行会

河野広道

1942 「ギリヤークとオロッコの木の葉人形」『工芸』107:11-14 日本民芸協会

笹倉いる美

1998 「ウイльта文化聞き書きノート 1：刺繍」『北海道立北方民族博物館紀要』7:93-103 北海道立北方民族博物館

1999 「ウイльта文化聞き書きノート 2」『北海道立北方民族博物館紀要』8:125-137 北海道立北方民族博物館

2003 「アイ子さんと私(4)切り絵」『nadasa』8 資料館ジャッカ・ドフニ

Соболевская, Н.А.

1997 Каталог игрушек народностей юга дальнего востока (из собрания Хабаровского краевого краеведческого музея им. Н.И.Гродескова) *Вестник Сахалинского музея* 4:66-129

山本祐弘 1943 『樺太原始民族の生活』 アルス

(ささくら・いるみ／北海道立北方民族博物館)